

編集後記

当「早稲田大学図書館紀要」の第一号が刊行されたのは、昭和三四年（一九五九）の十二月である。もう三〇年余も前のことになり、むろん、この稿を書いている編集子などが図書館に入らずとずつと以前のことであった。

創刊号の巻頭には「薦に寄せて」と題し、当時の館長で、この紀要の生みの親でもある大野實雄先生の「発刊の言葉」が掲載されている。途中、本誌第十七号から二十六号にかけて毎号巻頭に再録されていたので、我々にもなじみが深い、もういちど全文を引用させていただく。

図書館は大学の心臓である、と言われておりますが、その機能を全うするためには地味な努力を積みかさね、好意ある奉仕を惜しまぬこと、図書、資料および図書館に関する研究に打ちこむことが必要であります。書誌学および図書館学の重要性が加わるにつれて、本館でもこの種の研究がいよいよ活潑になりその成果を公開するため、紀要の刊行を必要とするに至りました。もとより研究成果のアブストラクトではありますが、刊行を続けてゆくことによって

本館利用者各位の組織的な研究に多少でも寄与することができれば幸いだと思えます。小さかった薦もただ今では仰き見る大木となりましたように、この紀要も健やかに生長してほしいものです。

「地味な努力」、「好意ある奉仕」、いずれも現在の我々には、なにか遠いところから聞こえてくる言葉のような気がする。しかし、図書館員の本分はこれなのだ。図書館員はけっして、時代の先端をゆくつかつこい職業ではない。コンピュータの助けをかりて、業務を合理化し、効率化したとしても、図書館員に求められることは、依然として「地味な努力」であり「好意ある奉仕」であることに変わりはない。

昨年、大野元館長から編集子宛にお葉書を送っていただいた。できあがった本誌を、手違いですぐお送りできなかったことがあり、恐縮しお詫び状とともにお送りした、そのご返事であった。編集子ひとりでこれを読むのはもったいないので、ここにまた全文引用させていただきたい。

アメリカの著名な図書館の館長さんから、「自分は教壇に立とうなど、考えたことは一度もない」ということを聞いたことを思

い出しました。教壇に立つて講義をしようと思えばいつでもやれるとの自尊心です。日本の大学では「司書職」の制度がしっかりと確立されていますから現役の皆さんが報われないのでしょうか。

「紀要」テーマは山積ではないでしょうか？ がんばって下さい！

いまさらのようではあるが、三〇年余の伝統をもつ「紀要」の編集に、軽い気持ちで携わってしまったことが怖ろしい。なぜなら「紀要」は薦と異なり、まだまだ大木というには程遠い状態だからである。その薦の木も、いまや我々の周囲にはない。新しい環境のもと、「紀要」はどのように進んでゆくべきか。館員諸氏の一層の研鑽、地味な努力を切に希望する。（記・松下）

早稲田大学図書館紀要 第36号

一九九二年五月十五日 発行

編集 早稲田大学図書館紀要

発行人 高橋芳樹 編集委員会
印刷所 凸版印刷株式会社
発行所 早稲田大学図書館

東京都新宿区西早稲田一ノ六〇一

〇三(三三)〇三 四一四一